農業高校における国語教育

——二つの授業をとおしての考察——

豊田克也

まえがき

「西条農業高校」は、広島から山陽線を東へ一時間、一面広い田んぼの西条盆地のはずれにある 学校である。生徒数は七百十名、農業科（A）、農産加工科（C）、農業土木科（E）、畜産科（Z）は男生徒のみのクラスで五百四十七名、農業家庭科（D）は女生徒のみのクラスで百六十三名である。これら生徒の大多数は兼業農家の子弟である。

初めて教師となり、農業高校へつとめて三年目の現在、いろいろかかえている問題点は多いが、その数々を、頭の中でもんもんと考えるよりも、その所在をたしかめ、次の発展の手がかりを得るため、まとめてみた。

内容は、学習意欲にはなはだしく欠ける組と、比較的よく学習する組の国語の授業の実態を一部示し、その中にみられる問題点を考察してみたものである。

以下、「一実態」「二、問題点」「三、今後の方向」「資料」という順序で述べていきたい。

一 実態

イ 三年C組のばあい

○**指導目標** 1・古文を読み解く力をつける。 2・作者の心情にふれる。

○**教材** 高等学校「国語三」総合（角川書店）65ページ～68ページ

単元「古代の文学」より「更級日記」

○**学習内容**

導入 「更級日記」について話す。プリント配布（プリントは資料一参照）

通読（さわいでいる生徒に指名）

範読

プリントの問一をやらす。

解釈を説明しながら、問二以下をやらす。

○**評価・その他**

最初は学習意欲の欠けているほうのクラスである。授業は、全体を通じて騒がしく、問の答を板書すると、$\frac{2}{3}$くらいはプリントに書きこんでいた。解釈の説明の時、よく聞いていると思える生徒は十名くらいで、それらの生徒はプリントにない所を全部教科書に書きこんでいた。しかっても静かになるのはその瞬間だけですぐ騒がしくなる。特にむつかしい所では、「先生だけでやってくれ」という声もあった。積極的に学習する雰囲気が少なく、私の〃一人ずもう〃ではないかと思わされた。試験の成績は思ったように大部分の生徒が悪かった。ところが百点を取った生徒が、その組にのみ二名いた。

試験後、資料二のような調査を行なった。なお、この授業は昭和三十七年六月中旬四時間にわたって行なったものである。

ロ、二年E組のばあい

○**指導目標**　1．地域社会に対する目を開かせ、そこに存在する問題を解決するには何が必要かを考えさす。

○**教材**　「国語二」高等学校用総合（筑摩書房）94ページ～105ページ

単元「報告」より「豆腐から生れた共同」

○**学習内容**

指名よみ

話し合い（読後感をたずねた。興味は持っていたようである。）

問答（前時間に、宿題として出していた次の問を、教科書を読ませながら、解かせていき、答を板書した。）

問一　部落に明るい光がさしたとあるが、それは何がきっかけで、そうなったか。

問二　それ以前の部落はどんな状態であったか。

問三　明るい光がさしこんだ後、計画はどのように発展していったか。

問四　その後、部落はどのようになったか。

課題（次の二つのことについて書いて来させ、結果は私が生徒に発表した。資料三参照）

一、この文章は我々にどんなことを考えさせてくれたか。

二、自分たちの部落で改善すべきことはないか。

○**評価・その他**

いいほうのクラスで、同じ頃四時間で扱ったものである。比較的興味を持って学習していたようである。身近かな教材であったからか。しかし宿題をやってきていない生徒もいた。また課題も、問題を自分のこととして考えないで、出しさえすれば良いと形式的に記入した生徒も多かった。

二　問題点

(1)　学習意欲の低調さ——その原因は？

イ　農業の将来性に対する疑問

一般に農業は将来性がないと見られている。労多くして、益の少ない農業一本やりで食っている人はごく少なくなりつつある。農村の子弟はどんどん都会へ出て行き、農家の嫁にはなり手がなく、農繁期しか青年の姿は見えない村はふえていっている。これらのことが、農業を学ぶ本校生徒に大きな影響を与えているであろうことは、想像にかたくない。

農業に従事している人は、そういう状態を「暗い」とはいわず、「農業は曲り角に来た」といっている。農業は近代化がやかましく叫ばれ、農業史上の一大転換期に来ているわけである。

このことは、別な見方からすれば、一個人としてやりがいのある大きな課題を農業はかかえているわけであるが、この自覚を持っている生徒はきわめて少ない。

ロ　学習環境の不備

A、実習と普通科授業との異質性

土を相手に汗水たらして実習し、次の時間が文法の時間となったりすると、生徒もちょっと勉強する気にはなれまい。疲れからか、いらいらしている時も多い。

B、学習することと就職後に必要な知識との不一致

本校は、農業及び農業に関係のある産業の、自営者の養成を主としてめざしているわけだが、その自営者になるのはわずか10%にも満たない。自分の学科と関係のある職につく者は、各科によって異なるが、平均五割くらいである。全然関係のない職につくもの、たとえば農業科の生徒が鉄工所につとめるような例が、二割から三割もある。将来何ら必要のないと思われることに、学習意欲の起こらないのもあたりまえであろう。

C、授業が欠ける時間が多い

農繁休暇、実習時間、自習時間などでよく欠けている。

ハ　将来に対する見通しの甘さ

風紀上の問題さへ起こさなければ、あまり勉強しなくても上の学年へ上がれ、卒業できる現実から、卒業しさえすればいい、そうすれば、求人難の今日、どこかに必ず就職できるだろうと考えている生徒が多いのではないか。

ニ　コンプレックス

人から聞いた話によると、近辺の中学校では、生徒の成績を順番にならべ、『何番から何番まではK高校（普通科の高校）、その下の何番から何番までは西農』と指導される学校が多いそうである。だから、遠方から農業を学びにくる生徒は良くできるが、そうでない生徒は、『自分は勉強はやってもどうせだめだ』というコンプレックスを植えこまれてしまっている。従って、成績の上下の差はきわめて大きい。

(2)　指導の欠陥

イ　国語の授業を楽しいものとできない

三Cのばあいは、教材の難しさ、生徒の自主的活動でなかった点にも原因するだろうが、なかなか楽しい授業にできない。できない生徒にこそ、興味の持てる教材、ユーモアをまじえた授業が必要なのであろうがだめである。騒ぐから静かにさすのに夢中で、余裕がなくなり、ユーモアもなくなり、授業がおもしろくなくなる。だからまた騒ぐというぐあいになるのが、この授業での現実である。

「先生だけでやってくれ」といわれないような、生徒と気持ちが一体になった授業がしたいものだ。

ロ　指導目標に対するあいまいな考え

農業高校という特殊性を考えた場合、目標をやさしいものにするとか、バラエティを持たすといったことが必要になってくるのではあるまいか。しかし、その時の考え方の基準がまだわからない。教科書にあるからその教材をやり、教材を研究してみて、後から指導目標を考えるというのでは、本末転倒ではないかという気がする。

ハ　押しつけるやり方と話し合うやり方のかねあいがわからない

無批判に、「さわぐ生徒をなぐれ」という生徒が多いが、自分としては生徒の人間性、自主性を尊重し、話し合って自覚をうながすやり方をとりたい。しかしその方法にも自分は限界を感じる。騒いで授業にならないことが多いのである。そこで頭からおさえるという、強制的なやり方も我が校のような段階では必要ではないかと思う。しかしその方法のみだと、授業はやりやすいかも知れないが、生徒からは無視、反発を示されるのみである。教師が人格的に完成され、生徒を引きつけてしまえば、生徒は決してそれらを示さないと思うが、なかなかそうはできない。これら二つの方法のかねあい、考え方がまだ自分にはわからない。

ニ　訓詁注釈主義の影響

自分には、一通り解釈をしなければやったような気がしない気持ちが強い。生徒も同様のようである。解釈をしゃべるだけでは退屈するだろうと思って、プリントをすってやらせようとしたのだが、一通り解釈をしていっているうちに生徒を退屈させてしまっている。特に古文の授業は、最初から生徒はほとんど逃げごしで、自発的学習になりにくい。

三　今後の方向

(1) 農学徒に夢を！

農業を学ぶ生徒に、これから大きく変化し、発展していく農業の未来図を示し、夢と自覚を持たせる必要があると思う。

(2) 農業高校の国語教育を！

農業高校という特殊性にもとづいた国語教育、ということをいろんな面から考えていく必要があると思う。

そういえば現在の国語教科書を見てみると、どうも進学する生徒向けの難解な教材が多いように思う。実業高校と普通科高校では別な教科書がいいのではあるまいか。また、生徒の興味のわくような教材を積極的に作り出していくことも必要であろう。

(3) クラブ活動の活発化

普通科よりも活動しやすいわけであるが、スポーツ関係の二、三のものをのけてははなはだ不活発である。無関心な生徒も多く、約半数の生徒がどのクラブにも加入していない。クラブ活動は、できない生徒（授業では一々見てやれない、どうしても切り捨てざるをえない）にも、高校生活の意義を自得させたり、適性を発見してのばしたりするのにいいのに。

(4) 自己研修をしっかりと

生徒の程度が低いので、教師は、教材研究や自己研修をおろそかにしてはいないか。

生徒ができない〳〵となげくだけではだめである。できない子であればあるほど、教師を必要としており、教育のしがいがある。これが最初の理想であったはずである。ところが手むずかしい組や生徒であればあるほどきらっている。それが無意識のうちに生徒に影響を与えていはしまいか、と考えると恐ろしい。

わたしのばあい、まだ忙しい校務がなく、補習授業も夏休み(一週間ほど)で終わりであり、農繁休暇も年に十日間ほどあり、比較的ひまである。これを受験問題研究にあけくれるのではなく、幅広い教養を身につけたり、研究に利用していきたい。

(資料一)

更級日記

一段　東国の物語の好きな少女が薬師仏などを作って物語を見たいと祈っていたが上京することになる。

問一　次の解釈は教科書のどこからどこへあてはまるか。

(1) 東国への道のいちばん果てよりも、もっと奥の方に育った私なのだから(人から見たら)どんなにかみすぼらしかったであろうが、(　行〜　行)

(2) 世の中に物語というものがあるそうだが、何とかして見たいものだと思い思いして、(　行〜　行)　なる＝(　)の意味の(　)詞　ばや＝(　)の意味の(　)詞

(3) 自分の思うままに、(本も見ないで)宙(ちゅう)でどのようにして思い出して語ることができようか。(できはしまい)(　行〜　行)　か＝(　)を表わす係助詞(結び＝「　」)

(4) とても(　が)気がかりなままに(　行)

(5) (　を)京(みやこ)に上(のぼ)らせて、物語が多くあるといいますが、(それを)(　行)

問二　「少女らしさ」はどんな所にあらわれているか。

二段　少女は思い出深い我が家をあとにするので悲しくなって泣く。「いまたち」での生活や景色についてのべ、「いかた」での仮屋生活の心細さについて述べる。

問一　次の解釈はどこか。

(1) 数年来遊びなれた所を、骨組みまでこわして、大騒ぎして(　行〜　行)

(2) (　の方を)ながめわたすと、人のいない時にはお参りしながらお祈りをした(　行)

(3) 大変風情があるので、朝寝などしないで(　行)

(4) ここを立ち去って行くことも、しみじみと悲しいのだが、同じ月の十五日雨があたりを暗くして降る中を、(　行〜　行)

(5) 仮住いなども、今に浮きあがってしまうほどに、(　行)

(6) 野の中に丘のように高くなっている所に(　行)

問二　この段を地名にしたがって三カ所にわけると、どことどこになるか。

問三　各部分ごとに作者の述べたかったことは何か。

三段　駿河国にはいって、岩壺の清水の冷たさ、富士の美しさについて述べる。

問一　次の解釈はどこか。
(1) 何ともいいようのない大きな石で四角な中に、（　行〜　行）の＝（　）を表わす格助詞（……デアッテ）
(2) およそこの世に類を見ない形だ。一風変わった山の姿が（　行〜　行）
問二　「色の濃い下着」「白いあこめ」とはそれぞれ何をたとえているか。

四段　沼尻をすぎて病気に苦しむが、浜名の松原の景色には感動する。
問一　地名をたどってみよ。
問二　次の解釈はどこか。
(1) 無事に通って、（それから）ひどく体が弱り出して、（　行〜　行）
(2) さやの中山など越えた時もいつとはわからない。（　行〜　行）
(3) 川岸に仮り小屋を設備したので、そこで数日すごすうちに少しずつ直った。（　行〜　行）
(4) 入江の何の風情もない州（土や砂がたまって水面へ出ている所）には物といっては何一つないほどで、（　行）
(5) 松の梢から波が越えてくるように見えて（　行）
問三　「その渡りして」（68・9）＝「そこを渡って」「そ」とは何をさしているか。
問四　「あと」（68・10）とは、何のあとか。
問五　「玉のやうに見え」（68・13）る物は何か。

五段　思いかなって上京したが、物語はなかなか手に入らない。ところが上京してきたおばが源氏物語など数種の物語を送ってくれた。そこで作者は、夜昼となく夢中になって源氏物語を読み、作中人物にあこがれる。
問一　次の解釈はどこか。
(1) （　）の心を慰めてやろうと、（　）は気づかって（　行〜　行）
(2) 人に頼むこともようしないで、（　行〜　行）
(3) 見たくてたまらないので（　行）
(4) 他の事は考えずに（　行）
(5) 大変美しく成長しましたね（　行）
(6) 筋もわからず、じれったく思う（　行）
(7) きさきのお位だって問題ではない。（　行）
(8) 物語を見ないでも自然と物語中の文句や筋が心に浮かんでくるのを、（　行）
(9) 年ごろになったら顔もこの上なく美しく、髪の毛もずっと長くなるだろう。（　行〜　行）
問二　作者はどのように物語を見たいと思っていたか。物語を手に入れてどんなになったか。
問三　「このこと」（69・8）「これ」（70・5）とは何をさすか。

（資料二）37年7月16日三年C組41名に調査（無記名）
(1) 試験の成績は
イ・悪かった　七十五・六％

ロ・だいたい自分の思ったとおりの点だった　九・八%
ハ・思ったよりよかった　十二・二%
ニ・無答　二・四%

(2) 国語の試験勉強は
イ・全然しなかった　十二・二%　五名
ロ・少しした　五十一・二%　二十一名
ハ・教科書を一とおり解釈した　三十六・六%
(大多数の生徒が試験勉強を満足にしていないことがわかる)

(3) 試験勉強をしなかった人はなぜですか。
(2)イロのみでなく、ハのものも一名記入していた)
イ・他の勉強でいそがしかったので　六名
ロ・おもしろくないので　五名
ハ・家事でいそがしいので　二名
ニ・その他　三名
（その理由は）
・国語の勉強のしかたがわからない。
・普通の授業の時勉強していないので。
・女の子が気になってわからない。（ふざけて書いているのかもわからない。）

(4) 古典の勉強についてどう思ったか。
イ・「よくわからない。むずかしい。面白くない」等記入したもの　二十一名
・むずかしくおぼえにくい。
・むずかしいからしたくない。
・ピーンと来ない。
・文法がだめだからだめ。
・僕達の頭ではむずかしい。(etc.)
ロ・「古典の学習は意味がないと思う」　三名
・昔のことならならっても意味がないと思う。
ハ・プリントについて記入したもの　三名
・プリントを作ったのはよかった。
・プリントばかりすると面白くない。
・プリントを多くやって、意味を正しくやって欲しい。
ニ、その他の意見を二、三あげてみると
・古典の勉強は非常に面白い。沢山して下さい。
・環境により、一・二年のようにはできなかった。（この組は三年になると急に学習意欲が低調になった。勉強したい気はあっても、まわりは騒がしいので学習できないというのであろう。）
・先生が解釈を全部せず、生徒に宿題に出して、やってきたものを発表し、先生がつけ加えたり、なおしたりしたほうが効果があると思う。
(古典の学習の動機づけに失敗していることが見てとれる。)

(5) 授業をまじめにするのが少ないのは、どのようにしたらよいと思うか。
イ 無批判型の意見
・さわいでも、どんどん進む。
・さわがしいものはなぐれ。
・しびらせ。
・授業をさわぐということは、結局先生がなめられたことに

なる。それで少しきついが暴力を使うと良い。
(コツンとやるのを「愛のむち」と生徒が受けとってくれればいいが、「きかされた」(単におどかすだけ)と取って、反抗的になる生徒が多い。反抗されるとしゃくにさわるが、自我の目ざめを示すものと見れば許せる気もする。体罰はやはり逆効果であることが多い。すべきことではあるまい。また、そうなった時の自分の気持ちはとってもいやである。)

ロ 反省・自覚型の意見

・先生が悪いのではない。結局皆んな一人一人自覚をもつことが必要。

・自分自分が考えなくては、良くならない。生徒全体の反省をしたら良いと思う。それについて討議したら良い。

ハ 忠告型の意見

・騒ぐ人は一応出席の型にしておいて、教室外に出てもらう。一回注意されるごとに減点する。

・勉強しないものはほっておって、勉強をする者を前の方に集め勉強すれば、話しも聞えるので良い。

・先ず大きい声で話して欲しい。(私は声をはりあげているのであり、むだ話しが多いので聞えないのである。むだ話しが悪いということまでわからないのか、わかっていても一時間緊張が続かないので騒ぐのであろう。)そしてもっと強く出てほしい。

・先生がもっときびきびとしかったら良い。(しかる前にその生徒の子供らしさがかわいくなってしまう。しかる時にはひどくしからないと効果がないということであろう。)

・静かになるまで授業しない。

・一心にノートへ字を書かせるようにする。(ノートへ写している時だけは静かである。)

・授業のしかたがわるい。それはプリント等すって渡すから、答えだけ書くようになるから。

・ある程度生徒のいうことを聞いたらよい。(授業へ行くとソフト・ボールをしようなどという。それをさせないからさせてくれ、といっているのではないか。)

ニ その他

・国語の授業がおもしろくないからと思う。

・生徒もだっている。先生の時間だけではない。少しひどいだけだ。(寸鉄人を刺すといった感がする。しらずしらずに甘やかした結果が、こうひどいといわれるようになったのか。)

(資料三)(主要なものを二、三のべるにとどめる)

課題1 「共同の力の大切さ」(九名)

「ひとを理解させるには、こちらが本気になってやってみせることだ」(四名)「何の改善でも普通の生活から生まれる」(二名)

「勇気と自信がなくては何もできない」(二名)

課題Ⅱ 「一、家柄・古いしきたりにこだわらない。 二、みえを張らない。 三、自分のことをたなにあげ、人のうわさが多い。 四、教育を受けさせることよりも働かす方向に話がまとまりやすい。」

「農村は従来夜おそくまで朝早くから働き、日曜迄家族総出で田

畑に出て働いているが（農繁期でない時）それほどまでしないと百姓は成り立たないのか、どうか疑問になる。なぜなら今までぼくが見てきた農家の隣人関係は、「隣に負けまい、隣がどうしたからうちもそれをやろう」などというような世間体を気にした、見栄をはっている。それが仕事だけのことならまだしも、家の中の私生活にもくいこんでいる（その家の、干渉、悪口、陰口など）。農村は見栄、世間体などというものを改善しない限り、農村のあらゆる面において何の近代化もないと思う。」

「僕の部落では、たいていの家には耕うん機があるが、この耕うん機を使う時はだいたい秋と春ぐらいなもので、あとは納屋に入れて納めている家が大部分である。これでは耕うん機はむだになるので、共同で買って使用したら良いと思う。」

（広島県西条農業高等学校教諭）